IATSSフォーラム30年のあゆみ

日本とアセアンの架け橋：IATSSフォーラム事業の軌跡
―創った人・学んだ人・支えた人・国際交流のこれから―

（公財）国際交通安全学会専務理事　石附 弘

1．IATSSフォーラム50回の軌跡を顧みて

IATSSフォーラム事業（三重県鈴鹿市）は、国際交通安全学会創立十周年（1984年）の新規記念国際事業として開始され、明年、創設三十周年を迎える。顧みれば、1983年12月、当学会の国際シンポジウムで本田宗一郎氏がマハティール・マレーシア首相の「将来のアセアン発展の源泉は『人材育成』にある」との考えに賛同、この高い志の下、85年９月、第１回フォーラムが始まり、対象国もマレーシアから、逐次アセアン９カ国（アセアン10カ国のうちブルネイ除く）に拡大、昨年は第50回フォーラムの記念の年であった。その間、多くの有為な国際的グローバル人材を輩出（卒業生総数は870名）するなどIATSSの中核事業としての役割を果たしてきた。

フォーラム研修生は、帰国後、①アセアン各国各界各層のリーダーとして国づくりに活躍するとともに、②各国内で日本を正しく紹介するなど知日派のオピニオンリーダーとして「日本とアセアンの架け橋」となり、③鈴鹿の地で育まれた「フォーラム・ファミリーの絆」を精神的基盤とする各国同窓会組織を結成、アセアン域内連携活動を展開、④各種自主的な社会的ボランティア活動の展開など、近年、活動の幅の広がりと深化が顕著である。⑤忘れてならないことは、研修生の生きたアセアン文化紹介や人的交流を通じて、鈴鹿の地の日本人および地域社会の「国際化」の道が拓かれたことである。

本稿では、50回という節目に際し、「創った人・学んだ人・支えた人」を振り返りつつ、フォーラムが目指した「国際化」の理念とは何か、何故、アセアン各国の文化・風俗・背景も異なる若者の「人材育成」（国際的難事業）が可能となったのか、何故、続けてこれたのか、有為な人材育成は果たされたのか、本公益事業が生み出してきた「国際的・社会的な新たな価値」とは何か、価値創造のメカニズムとは何か、これからの課題は何か等について考察してみたい。

2．フォーラムが目指した「国際化」人材育成の理念

１）IATSSフォーラムの設計思想

IATSSフォーラム創設の総指揮官岡村總吾氏（当時、当学会副会長兼フォーラム塾長、実行委員会委員長）は、フォーラムの目的について、①東南アジア各国から、それぞれの国で将来その国の指導者になるような若い優秀な人々を、②日本に招き、③「日本の近代化」をメインテーマとして、④「共に考え共に学ぶ場」とするとし、⑤理念の元になった考え方や背景、⑥制度設計上の課題（東南アジアから優秀な参加者をどう集めるのか、研修プログラムをどうするか等）、特に、優秀な参加者の募集についての国際的枠組み構築への並々ならぬ思いを述べている（「IATSSフォーラムの理念」IATSS Review、Vol.15、No.3、1989年９月）。

２）国際化の根本＝Thinking and Learning Together

岡村氏は「国際化の根本は、自分達と異なった文化、歴史、社会、宗教のもとに生活して、自分達と違う考え方をし、自分達と異なる言語を話す人々の居ることを、頭脳だけでなく、身体で理解し、それらの人々と自由に交際し協力すること」（前掲誌）だと定義している。つまり「国際化の根本」（真髄）を知るためには、それらの人々と自由に交際し協力できるような環境、すなわち、「共に考え共に学ぶ『場』（フォーラム）」の整備とこれを「五感で体得させる方法」（研修プログラム設計）が必要であった。

３）「フォーラム方式」の必然性と二つの国際化

人材育成の理念は「人と人の間の真の相互理解が達成されること」に置かれ、「教える側と学ぶ側とがそれぞれ一方通行になることを避け、共に考え学び合う『場（フォーラム）』とした」（ホンダ社報1985年、HONDA News-file）。関係者の証言によれば、今から四半世紀前は、「国際化」という概念はあっ

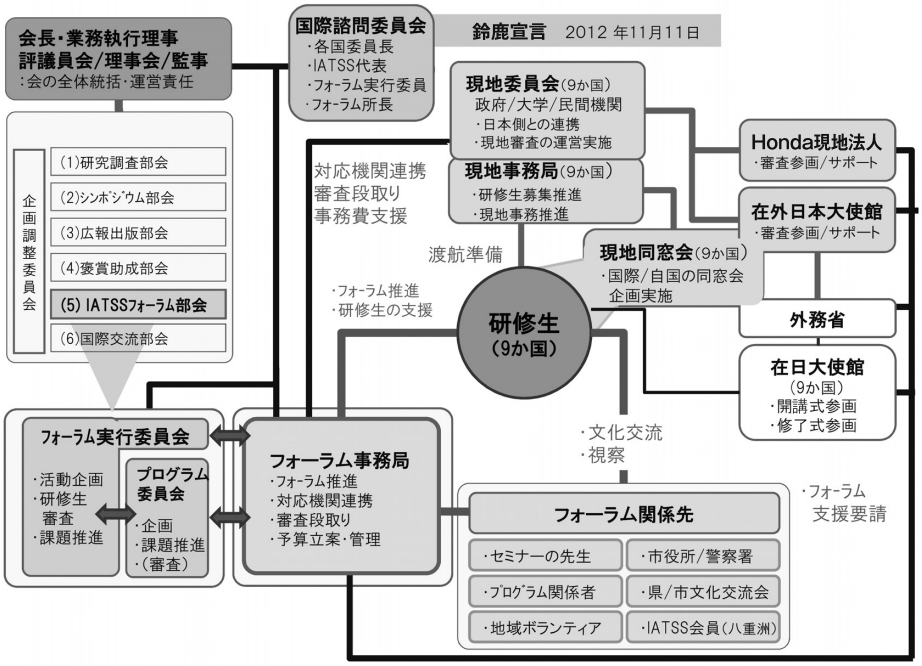

Fig. 1　フォーラム活動を支える関係部門の相関図：2013年９月１日

ても、これをどう実践していくのかの方法論が不詳の時代であり、まして鈴鹿という地方都市においては誰も経験者がいなかった。学会の「国際的」事業とは、①アセアンの若者育成を核としつつ、②フォーラムスタッフをはじめ日本人および日本社会の「国際化人材育成」という二つの社会的使命(「新たな社会的価値の創造」）を背負った国際的社会実験であった。初期の頃、鈴鹿市や県、他県からもフォーラムを「国際化モデル」として視察にきていた事実を忘れてはならない。

3．フォーラム事業基盤としての国際的枠組み・研修体制・研修プログラム

岡村氏は、前述のとおり東南アジアから優秀な参加者を集めるための国際的枠組み構築如何が、フォーラムの成否を決める要だと強く主張されていた。すなわち、質の高い研修生を確保するために、各国にフォーラム事業を支える組織基盤を整備（国際諮問委員会や現地委員会）し、各国における研修生の応募・審査事業、同窓会組織の結成・運営などの事業、各国現地委員会とフォーラム事務局の一体的連携活動、帰国後の受皿としての同窓会組織とその活動による後輩への勧誘などが要となるからである。

現在の「フォーラム活動を支える関係部門の相関図(**Fig.1**)」を見ると、当時の制度設計の骨格に肉がつき血が通い国際信頼の歴史が育まれてきたことが分かる。何故、アセアン各国の文化・風俗・背景も異なる若者の「人材育成」という国際的難事業が可能となったのか等の答えの一つはここにある。設計思想の正しさと、これを受け継ぎ､研修生の送り手･受け手等ボランティア精神を基盤とする国際的ネットワークの構築努力、事務局スタッフの真剣な刷新努力、その他多くの関係者の本事業への深い理解や協力等関係者間の強い信頼関係によって合成された「意思の力（国際的価値創造エネルギー)」である。以下、その概況を説明する。

１）少数精鋭・優秀な研修生の持続的確保

各国対応機関の違いや募集方法の違い、国の発展段階などの諸要因により、研修生は毎回多様であり、フォーラムのユニークさとなっている。

２）専従スタッフの配置と使命感（研修全体のマネージメント主体）

IATSSフォーラム事務局には、専従のスタッフが配置され、毎期、おおむね18名の研修生と親身に接するなど、特別の接遇が行われている。

３）「国際化人材育成」の内実化・深化

「国際化人材育成」に関し、研修内容別カテゴリーの変遷を分析すると､初期の「日本に学ぶ」では「セ

ミナーや視察」中心のプログラム（研修生にはレポートの義務化）から、その後の模索期を経て、2003年以降は、GS（グループスタディ）中心のプログラム（研修生自らが考えグループで議論をまとめあげていくプロセスの学び）に比重が置かれるようになった。

国際化人材育成に、次の五つのフェーズ、すなわち、①他者と共に学び共に考えながら（その経験や歓びを通じ）、②それぞれが主体的にかかわり合い自分自身の新たな価値を生み出す力を習得、③その研修の厳しさの中に達成の喜びと自己成長を求めていくことが大切であることを理解させ、④これを五感で体得させることにより、⑤真の『国際人』として自立することができることを研修生に気づかせること、があるとすれば、フォーラムの歴史は、②③④の充実など五つのフェーズの内実化・深化の歴史であったといえよう。特にここ10年の研修プログラムの積み重ねによって、事務局スタッフ、研修生ともに具体的実践プログラムの定着化・深化が看取される。

4）合宿生活・研修一体型プログラムによる「新たな価値創造」

その意味で、10年前開始の「チームビルディング」合宿方式の意義は大きい。「初対面の相手を相互に知り合い、しかも協働しなければ一つのこともなし得ない(チームワーク)」という研修の理念を、参加体験型で体得してもらう手法である。

自分と異なる他者との本音のぶつかり合いなくしては相互理解もあり得ない。これまでの経験則上、これが可能な状況になるのは研修後40日前後からであり、その後の10日間が「魂と魂のぶつかり合い」の真の「国際化」の佳境期だという。人はこのくらい一緒にいると本性を隠せなくなる由（現場スタッフの証言）である。「人と人の間の真の相互理解が達成されること」というのは、事程左様に、難しい事業である。ましてアセアン各国の異質性の相互理解となれば、なおさらであるが、この手法は研修生からも高い評価を得ている。

5）「鈴鹿宣言」(2012.11）を踏まえた研修内容の改善

さらに昨秋からは、「鈴鹿宣言」を踏まえ、「研修全体の一貫性」に力点を置いた体系的なプログラムとし、IATSSの学会事業の紹介やその知的資源を活用した「理想的モビリティ社会の視点」を取り入れ、会員の最新研究のプレゼンを行い、研修生から高い評価を得た。

6）ボランティア等が果たしてきた「国際的・社会的価値」の創造

鈴鹿の地域ぐるみのホスピタリティ（鈴鹿市はじめ行政や警察、地域関係者など多様な日本人・日本社会・日本文化とのふれ合い交流）は、研修生にとって「日本人や日本社会の特質」の理解とともに、多くの社会的価値や意味、人間性の学びの場となっていることが確認されている。

特に、地域のボランティアの方々は、①草創期から、「国際化」事業の共創的パートナーの役割を担っていた。②国際的・社会的・人間的こころの交流の場、具体的には、ホームステイ（普通の日本人の実生活体験は、一生の思い出）であり、さまざまな日本の伝統文化（着物・茶道等の実技作法・立ち振る舞い）や担い手の日本人に直接接した感激も大きく、研修生が鈴鹿にもたらしたアセアン文化紹介など、双方向の「アセアンと日本の架け橋」の創造の形がある。③特に重要なことは、地域ボランティアと研修生との持続的な相互理解・相互信頼の絆によって、研修生は帰国後、家族や友人に日本を正しく伝え、「双方の架け橋」の拡大現象が見られる。④さらに研修生は、地域のボランティアの「人と社会をより良くするための無償の行動」を目の当たりにし、これが帰国後の社会活動を触発している可能性が高い。このように、無形の国際的・社会的価値創造のメカニズムがあることを忘れてはならない。

7）公的機関の積極的支援による「国際的・社会的価値」の増進

在日各国大使館および各国の日本大使館のフォーラム事業への協力・支援は、事業の大きな支えになっており、民間の「アセアンと日本の架け橋」の「鎹の役割」を担っている。

8）創業者の高い志・基金、そして本田技研工業㈱の持続的支援

これまで公益事業の継続が可能であったのは、苦しい時期にも支援の手を緩めなかった本田技研工業㈱の、本事業に対する熱い思いと創業者の教え(「桑の根を抜くな！」）であったろう。

4．「アセアン発展の源泉」として本当に役立っているのか？

1）社会的に重要な地位にある卒業生リスト

各国諮問委員会委員長や現地委員会および卒業生情報を総合すれば、アセアン９カ国870名の研修生

の多くはさまざまな分野で社会的に重要な地位にあり活躍している由であり、各国ごとの代表的人物の把握がされているが、全体像は不詳である（代表例の一部を**Table 1**に抜粋）。

そもそも何をもって「アセアン発展の源泉」となる「人材」といえるのかという問自体、時代や環境、立場によって、その「物差し」が違ってくる。こうした問題状況の中、今般、同窓会組織によって評価の手がかりを掴むことができた。

２）国際化人材育成：フォーラムの経験の「意味と価値」評価調査－全フォーラム卒業生に対する初の意識調査（850名中135名から回答、13年７月）

本調査は、現地委員長はじめ多くの関係者の協力の下、「フォーラムでの経験が研修生のその後の人生にどのような意味や価値を持ち得たのか」等について初のサーベイ調査であり、直近２年の卒業生の５割から回答を得、「Presentation on Impact Assessment Survey of the Program Hanoi, 22 June 2013」で発表された。これまでこの種の調査がなかったことを考えると本調査は画期的であり、フォーラム事業や同窓会組織のあり方を検討する上で極めて貴重な資料であり、ハノイ同窓会の大きな成果として高く評価できる。

⑴仕事への影響では、５段階積極評価法（以下、同様）で、５レベルの同意42%、４レベル38%であった。最多がInternational exposureで、Know how to work in team（teamwork）, Leadership skills, Promotion, More devoted and inspired to work, Networking opportunities（in ASEAN/Japan）, Management skillsと続く。

⑵個人の発展への影響では、５レベルの同意52%、４レベル40%であり、具体的には、最多がMore confident, Different mindset/open minded/listening skillsと続く。

⑶コミュニティ貢献への影響では、５レベルの同意33%、４レベル35%であり、Volunteer/Community/charity activities/projects, Sharing knowledge/experiences, More responsible/compassion to the local community and Vulnerable groups。

⑷日本への理解では、５レベルの同意53%、４レベル31%で、Developedmodern, powerful economy, Well preserved traditional value and culture, Hard workingと続き、日本人への理解では、５レベルの同意57%、４レベル35%、Open/friendly/hospitable/warm、Hard working／dedicated, persistent。

⑸アセアンへの理解では、５レベルの同意54%、４レベル31%で、Understand more ASEAN countries, Diverse and different but share similarities, Should help each other to develop a strong communityと続く。

３）研修生（第50回）の学び・成長のまとめ（フォーラム事務局、13年12月17日）

毎回、研修成果を測定しているが、今回は新しい試みとして、個人、グループ、社会の三つの学びの観点から、新プログラムに対する研修生の「学びと成長」について調査を行った。意識調査報告書によれば、研修全体の総合評価は「大満足８名、満足10名」であり、具体的成果として次のような回答がなされた。「人づくりの現場」の研修生とスタッフの「生の声」を抜粋して**Table 2**に紹介する。

４）同窓会活動

13年のベトナム・ハノイでの同窓会には、関係国から約120名が集まり、IATSSフォーラムのモットー「共に考え、共に学ぶ」をテーマにグループ討論を行い、ネットワークのさらなる強化を織り込んだ「ハノイ宣言」を発出した。

５）各国における各種自主的な社会的ボランティア活動の展開（抜粋）

Table 3に一部を紹介する。各界各層において同窓会による社会貢献活動の展開例が見られる。

６）研修生の生きたアセアン文化紹介や人的交流が日本社会の「国際化」を促進

フォーラムの存在やアセアンの研修生との交流が、鈴鹿の日本型コミュニティ社会に与えた影響には大きいものがあり、日本人のアセアン理解が深まった。説明は省略する。

５．新たな国際合意：「鈴鹿宣言」の意義

12年、IATSSフォーラム国際諮問委員会が７年ぶりに開催され、フォーラムの新たな方向性について国際合意が交わされた。鈴鹿宣言は、28年にわたるIATSS（フォーラム）とアセアン各国関係機関との

Table 1　卒業生リストの抜粋

シンガポール	Mr.Tan Hung Seng	シンガポール議会アセアン代表　元シンガポール在エジプト大使	第17回
タイ	Ms.SiriwanSiriboon	チュラロンコーン大学　人口統計学機構研究委員長	第5回
	Ms.Chatrani Yooyen	公衆衛生省Suansaranrom病院臨床科学部門長	第8回

友情が相互の信頼に基づく揺るぎないものであり、長い時間軸の中で双方それぞれの環境変化にもかかわらず双方の努力でさまざまな困難を乗り越えてきたことの証であり、今後さらにフォーラム活動を強固なものとしようとの双方の「強い意思の表明」であった。合意に基づく力強い新たな歩みは、フォーラム活動のさらなる深化・発展を予感させるものである。

6．今後の課題：IATSSフォーラムの「新たな国際的・社会的価値」創造のために

1）「一粒の種」が「アセアンと日本をつなぐ国際的ネットワークの大木」に

本事業は、日本とアセアン双方の国際的ボランティアの持続的協働作業によって、国境を越えた新たな「国際的・社会的価値の創造とその継承エネギー」を育んできた。各国大使館および本国の関係機関団体等、双方の友情と信頼に基づくサステイナブルな関係性(絆)の存在、何よりも双方のIATSSフォーラム事業に対する「意義や価値」の共感性・協働性が相俟って創出される「共通の価値創造への意思の力」が、創業者によって播かれた「一粒の種」を、現在の「アセアン各国間・アセアンと日本をつなぐ国際的ネットワークの大木」にまで持続的な成長を遂げることができた力の源泉である。多くの関係者の力のベクトルが、新たな国際的・社会的価値の創造や拡大再生産につながるよう、関係者のさらなる精進を期待したい。

2）次世代「共生から共働への社会の変革」の担い手育成への視座(Transdisciplinary)

異質性への寛容社会、多様性との共生は、21世紀「文化の世紀」のキーワードである。

Table 2　第50回研修生の「学びと成長」についての調査結果（抜粋）

問：あなたが自信を持ってフォーラムを通じて学んだこと、達成できたものは何か？
答：「文化の違いと多様性、チャレンジ精神、問題解決力、他者との違い、チームワーク、グローバル思考、日本人的考え方、日本とアセアン諸国の幅広い知識」が多数を占めた。

I. 個人レベルの学び（①知識・スキル・考え方、②人間的成長、③活用）

問：知識・スキル・考え方としての学びは何があったか？
◎フォーラムの研修全般を通して多くのスキルを学び、視野が広くなった。（意見多数）
・いつもの自分を知っている人間がいない状況下で、自分の力を試し新しい発見を得るには最高の環境だと思った。（ベトナム・タイ・シンガポール・フィリピン）
◎日本社会・文化を通じさまざまな「発見・学び」を得て、深い刺激になった。（事例省略）
◎特に「武道」セミナーを通じ日本人の精神を学びそれに深く感銘を受けたことがうかがえる。
・武道は単なるスポーツではなく、心身を鍛え、困難に立ち向かえる強い精神を養う道徳教育と知った。（ベトナム・タイ・シンガポール）
◎リーダーシップに関して改めて考え、自分を見つめる良い機会になったことがうかがえる。
・リーダーは、チームの力を最大限に引き出し同じ目的に向かってチームを引っ張っていける人材でないといけないと学んだ。（ベトナム・タイ）

問：一個人としての「人間的成長」はどのようなものがあったか？
◎研修を通して自分の新たな一面を発見する事につながったことがうかがえる。
・フォーラム開講後すぐにスタッフまたは合宿トレーナーからの常に「新しい自分を発見してください。過去の自分を知る人はここには誰もいません。自分を変えてみたいと思う事があるのならここは絶好のチャンスです」とメッセージを与えられていた。（多数）
◎新たなチャレンジを自分に課し今までの自分の殻を破る事が出来たことがうかがえる。

問：学んだ知識・スキルをどのように活かせられたか／活かしていきたいか？
・これからは、後輩、部下の視点から物事を考える事が可能になるだろう。「人を育てる」というリーダーとしての大きな責任を学び、今それを自覚している。（インドネシア）

II. グループレベルでの学び（①スキル・考え方　②「人間的成長」）

問：多様性に富んだグループの中でどのような実践的なスキル・考え方を学んだか？
・今までの自分の知識・視野・考え方が如何に狭く、限定的だったかを知る素晴らしい機会となった。このdiversityの環境の下、考え方、視野が大きく広がった。（多数）
◎他研修生、事務局からの自分に対する「フィードバック」を通して、「他人の目」を通じて自分を見つめるチャンスとなり、自分を冷静に見る事ができたことがうかがえる。
◎多様性に富んだ環境下で人間関係を如何に築いてゆくのかに苦労しながらも、その術を学びとったことがうかがえる。

III. 社会レベルでの学び

問：フォーラムでの学びを自国に持って帰ることが、新たな価値・変革を生み出す可能があるか？
◎「持続可能な地域づくり」スタディを通して、「まちづくり」「コミュニティ」に対する意識が大きく変わり、コミュニティへの関わり方に大きな変化の可能性がうかがえる。
・帰国後は、外面的な「都市開発」ではなく、内面の「まちづくり」の視点で地域をとらえ、住民の結束が強まる地域づくりをしていきたい。（シンガポール）
◎コミュニティに貢献したいという気持ちが芽生え行動に移したいことがうかがえる。
◎まず自分の周りから小さな一歩を踏み出す事が大事であると考えていることがうかがえる。
・日本で得た知識や体験をもとに職場の仕事に対する意識や姿勢（規律を重んじる、時間厳守、整理整頓の整った職場）を少しでも日本的に変えていきたいと思う。（マレーシア）
◎自分たちのできる範囲で自国に貢献してゆきたいという強い思いがうかがえる。

注）◎は事務局でまとめたもの。

Table 3　各国における自主的なボランティア活動（抜粋）

国	プロジェクト名	内容	資金元	実施時期
カンボジア	クーリング・カンボジア	市内の小学校にて、地球温暖化への注意喚起を目的にした啓蒙活動イベント　（IATSSフォーラムGSプロジェクト）	IATSSフォーラムプロジェクト資金	2011年～
	教育チャリティイベント	地方の貧しい、外との交流機会が乏しい小学生に、文具教材支援・「終わりなき学び」をテーマにした啓蒙活動イベントの実施	同窓会募金、チャリティー活動	2013年
インドネシア	幼稚園児への交通教育活動	Astra Honda Traffic Parkや幼稚園・学校などと協力して、幼稚園児への歌、踊り、競技会等を通じた交通安全啓蒙活動の実施	現地協力組織、IATSSフォーラム	随時
ミャンマー	チャリティ、福祉活動の実施	イベントを通し資金を集め、HIV孤児への勉強道具の寄付やモラル向上のための同窓生における知識共有実施。また、障害のある人への募金活動の実施	同窓会募金、チャリティー活動	随時

01年11月、第32回ユネスコ総会「文化多様性に関する世界宣言」において、異なる文化間の相互理解を深め、寛容、対話、協力を重んじる異文化間交流を発展させること、さらには、「自己の存在のために他者(非自己)の存在は不可欠」という認識、「自分は他のすべてによって生かされている」という存在把握が新しい価値創造の源泉であり、ひいては世界の平和と安全につながるという考え方が、人類の普遍的な価値として国際社会で広く認められるようになった。また、これを推進するためには、領域横断的アプローチ(Transdisciplinary)が必要であるとも指摘されている。

他方、異なる文化間の「真の相互理解や協働」は、そう生易しいものではない。

13年は、奇しくも「日・ASEAN友好協力40周年」の年であったが、この激動の内外情勢の中、フォーラム事業の今後の方向性について、幸いなことに、実行委員会やプログラム委員会、事務局において大変熱心な議論が行われ、「Society with High Mobility」「IATSS FORUMの目指すLeader」などの方向性が示されたことを報告して筆をおきたい。